

162
657

呆然閑史著
長夜
之樂
笑本

全

091902-000-8

特49-95

笑本

呆然閑史／著

M25

DBO-0439



長夜笑本緒言

意々始まりませ此笑本の緒言がさて世の中の助平連中は

笑本とさへいふば春書でもあるかと推量するいらさ人様

もムりませうが中々左様の事ならず春書の如きと笑ふて

鬱と散ずるより一に思ふて神経病の種となるもの多く

して特々風俗破壊の汚れ本文明開化の世となりてとノル

マントン号へでも積み込みて紀州沖へと遠ざりて元の忽

必烈でも船長に任じ弘安の役の神風と大ある四羽にて紀

州沖まで仰き送りドゥと一風諸共覆り却すべきものを

かし今此笑本に記載すると中々そんな野卑ある者ならで
而かも此書と掲ぐると嘘は百年の其昔し支那の東方觀の



其親爺逆鉾頓と云ふ奴が羅馬法王より莫大の旅費を頂戴し遠く我日本の江戸迄來りて兩國橋邊のおもちや屋へ船一艘を注文し三日計りにて出來上りたれば其船の名を獻比臘と名づけ保祿元年藥罐年鍋の三月茶釜の元日三和煙御世といふ美人と携へて頭おは天獄羅鍋を被りて横濱港と出帆し一萬有余の年月間所々方々を周遊し見聞き知つたる出鱈目を集め集めて其中より臍を堅り取鎮め腮をつかり外さぬ様注意よ注意を加乘して撰び抜いたる珍々奇話取るよ足らざるお辨茶羅之が泣のせよ居らりようか泣く程つらた辛苦して集め集めし此笑本面白可笑く讀下せば自然と腮と外らん醫者や藥を玄や笑と止まぬ胡椒の十石廿石觀音さまへ願掛けて踏摩の鹽辛飲めばよいそ

をも協はぬ事なきば寧ろ此書を読まぬあらごうした苦勞はないものを是れも浮世の義務じやとて買つて見たのが身の因果寧ろ緒言の一段よて止めてまま同かそれよてと却て先が氣に係る先づ腸の續く丈り見るととまよう哉ドレとん事を書いてある………

長夜笑本目錄

- 第一笑 面白演説
- 第二笑 撰事事務所
- 第三笑 欺騙の要心
- 第四笑 饒舌鼻
- 第五笑 お三の傳
- 第六笑 狂大學

長夜笑の本

第一笑 面白演説

嘲笑諸君よ諸君さつたら諸君借世れ中に面白くと云つた
 面白くもれと澤山ある先づ猫、犬の顔と始めとして牛、馬
 の顔に至るまで實面白と思つたら切となれもれです
 能く世間でいふよ若ん中は犬や馬の顔を見ても可笑い何
 と見ても笑ひ出すがツツ一汝へ見たように笑つて計り居る
 奴かほるものか杯と叱ります私に或る時途を歩きなむら
 考へ出しましたそれ程面白いか知らんと思つてツツ
 々々犬の顔を見よとびりますツツ一思つて見ると實も犬
 は妙な顔を持っております随分笑つていふ價値ある顔で

又それから又馬の顔をも能く見ました馬の顔と云つたら
 又一層面白いのですそれはモト馬は顔は丸で杵へ目鼻を付
 けたようです若いもの所ではあるが我々年も取らない老人
 が笑ひ出して止まらなむとありました面白いと思つて
 見たらそをばモトたまたまらなものです其外又世の中も面白
 可笑い事は澤山あります死んだ馬もつたれば迎ても歩け
 ません程です併しインクラ面白い事は澤山あるからたつて
 盲婆を千人も野原へ放つて喧嘩をさせる程面白いとはあ
 りますまいと思考致します其處で今盲婆が野原に於て喧
 嘩をする有様と見てたならば如何なる泣きじようこの人
 間でも噴き出さないものはムリますまい其をと同時に盲
 婆程世の中の役も立たないものはないとを考へるでムリ

ませう何となれば丸で目茶苦茶ぶからでも敵も身方も分
 らせ何でも構はず撃つるからですそうかと思ふと此方
 方でハ轉んで天は糞を手に踏を付けてる奴がおりますを
 うかたすると彼處の方で小便桶の中へ足を踏ん込んでい
 る奴がおりますそうかと思ふと此方の方で土橋を踏
 抜いて逆さに落ち込んで泣いている奴がおります併し盲
 婆の泣くの目も塞つてゐるんだら涙が出ない涙が出な
 いから申談に泣き聲を出している様も見えるそれだから
 傍に見てる奴の如何に巫山戯るたつて盲婆は巫山戯る
 もの天地五大洲の中にないと思ふでしょうそうかと思
 ると彼處れ方での糞と踏んで飛び上つてる奴がおります
 此方れ方でのしらばつく色でソートお尻をしてる奴が

八
あります彼處の方で隣りの婆が打たれたのを余り愛が
大きいから自分で自分が打たれたと思つて口惜しがつて
奴がありまます此方れ方で猫と取つたらまいて犬だと思
つてウソウソと泣けなどと洒落れてる奴があらまます彼處
の方で財布と失して見付けてる奴があらまます此方の方
では下駄と片いりば取られてピッコを引いてる奴があら
まます夫れ斯くの如しです盲婆の合戦又愉快なりと聞つて
さです併しながら又盲婆合戦のみ面白可笑いと云ふ譯で
なく其見物人も亦甚だ實に面白可笑いと云はなければな
りません密柑を食いなぶら見てる奴は合戦の面白さのあ
無意になつて密柑の皮と二つにチヨウ切つて両手と擧げ
るものがふりまてる中にと腮の骨を外づして口も何も聞

けなくなつてゐる奴があらまます中よは臍の居場所が分らな
くなつて搜索してゐる奴があらまます中にと草麴を食べのち
て鼻から布引の瀧の様に二三本噴た出してる奴があらま
す中にと小便をしあぐら衣物にヒッ掛てる奴があらま
す中には土堀板を踏んで抜いて泥ぶらけになつてゐる奴が
あらまます中には片目子の奴なぞは自分に比べて余り笑ふ
とも出来なないものぶから口で余んまり面白くつて兩眼で
見られないなぞと洒落れてる奴があらまますピッコの奴と
余り面白くつて足元に氣を付らあいかから糞を踏んだ糞を
踏んだ杯とピッコを胡麻化してゐる奴があらまますと思ふと其後
から来る鼻ッ欠はあう臭いあう臭い杯とぬかし手で鼻ッ
欠と隠してゐる奴があらまます飯と食つてゐる奴なぞは飯粒と

噴き出して之を拾つて食べるに猫の尻から出た虫など
間違いて食べてる奴が有ります中で蒟蒻のおでん杯を食
べてる奴は面白さに堪へ兼ねて時の聲を擧げて味噌ぐら
けのおでんをおツ振つてる奴が有ります其傍に居る見物
人と味噌と振り付けられて便所のウチ虫が壺の中へ轉げ
落ちたやうな風をして笑つて居ります中は利口でもな
い痴に人を馬鹿にするなんてい怒つてる奴が有ります
夫れ斯くの如しでも盲婆は合戦も見物人の有様も實に隣
が茶を沸かす程面白い併しあふら斯くの如くは面白いの
も皆之を見て人間の間持次第です可笑いと思つた日には
は何も蚊も可笑くつてたまらない又哀れと思つた日には
何も蚊も哀しくつてたまらない假令へば蟻の葡萄つてる

十

のを見て哀しんでる奴が有ります雀の飛んでるれを見て
泣いてる奴が有ります人の顔は蠅の舞つてるのを見て
ソソソ泣き出す奴が有ります此等は皆哀れと思ふ心持
で見ると哀れいのですそれだから荷くも人類たるもの
は笑ふやうと思つたら笑ふ氣になり哀れいものと思つたら
哀む氣よならなければいけません此笑本などは面白くと
思ひ笑らるやうと思つて見なければ何よもありません自分
の可愛い噂が死にそうに苦しんで居る時分杯に見てもサ
ッパリ面白くない然るが故に此本を見るよと豫じめ笑ら
るやうといふ決心を爲し而して後此第一笑からゲッヤ々笑
はきんを希望致します

此演説終りたる處へ隣の家から参りまして私共の愚妻

十一

其の命を引きて取りまもた……(辨士)アハハハハハハ
(隣人)チノダ笑つて居やるらと云ふて飯る
第二笑 撰事務所
頃には三月の初旬にて所は何處か分らぬを唯見る一個の撰
事務所に演説會の歸り路に辨士の一行が多くの壯士に護
導せられて命からや々逃げ飯つての大騒ぎ其を寶丹よ其
れ千金丹よ其れ氷よ其れ水よ其れ醫者よ其れ按摩よ其れ産
婆よ其れ何其色何其色女中は何處へ行つたんだ小使は何
をしてゐんだ其れノルマントン其色敵比艦其れ西郷隆盛
ヨリヤ皆んな如何したんぶど自稱紳士と思しき男子は水
呑むつて湯き水をば倒れたる辨士の顔もと吹た掛くれは
アハハハと云つて飢饉鼠の半風子然たる面附に蚤の小

便桶の涙と流しハット一息吐きて虫の息と思ふ程の
小聲にて「オイ茲は何處ぞエオオ君堅かまろい茲は事務所
だよ」ウウウガ僕は闇魔の窟かと思つて居たそれをやア
ま僕と生きて居るのぶチ「生かてる所のヒヤヤやだ」ウ
早く醫者と呼んで療治は取り掛けて呉色い大方急所に掛
つて居るぶチ「エニガヤ何處か掛何處ぞさろの肩先から
脊骨に掛けては太傷だもの」トリヤ々々見せ玉へ……傷は
乃か何とも成つてはいゝよウウカト己を小障つて見
後處に戯の聲から出たアノ騒の時に借に僕に切り付けた
娘が有つて「ヤ」としたに相違なかつたドウしても切ら
ねど居ない筈があいよト見玉へ掃絛の襟のら脊中へ掛け

此處より血で濡れて居る君醫者を呼んで呉れ給へ
 僕に逆ても助すからない……と泣いた出せば「待ち給へ君
 夫を血ぢやないヨリ水だア……」と能く見てもみよう君大丈
 夫の大きい木の上から雪の塊が落ちて君の車へ……掛つ
 たろウア……」と聞いたア……」と聞いたア……」と聞いたア……」
 彼時……」と聞いたア……」と聞いたア……」と聞いたア……」
 もや壯士は襲撃かと周章狼狽き奔け出せば自分の抱いた
 土の酒は酔つて七八人揃つて階子段より轉げ落ちたるな
 れば……」と聞いたア……」と聞いたア……」と聞いたア……」
 壯士は五六百人今夜二時を期して此事務所を打毀しお
 押寄せるツツで兄弟分の車夫の方から知らせて呉れまじ

たツリヤ大變ぶ向ふ横町で掴み合つた按摩道で轉んだ
 お三さんが臺所で招鉢を破はした小僧の廊下で土瓶を引
 り返した裏の敷で大ッ噛み合つて天井で鼠が駆け廻
 る庭で猫が死んでるマ……如何うしたらよかんべいナ……」

第三笑 欺騙の要心

未だ曾て一面のなきお店の若衆風の者ツト入り来り
 私には真向ふ横町の薬師商丁子屋の若い者でム……」
 一対先生に目通りを願ひ度う存じます」と申す故別に醫
 士の家へ薬師屋の若い者が来し事なれば更に不審とも思
 はす取次を申しけり此方へ通せとの仰せなれば直に奥
 の一間に通せば先生出で来るへい先生御無沙汰を仕りま

し「ハイ々々毎度又無理を頼んで」毎度難有う存じます主人も宜しう「ハイ何日もお忙おしくつて結構だね」難有う今いまとさて今日は先生に折入つてお願ひ申たいことお願ひ申して「ウン何んぢやナ」エー病人でムいます「病人、ハハ」其れは々々御主人か「エー手前朋輩の者で」ホト朋輩は者其色は瘡毒か痲病ぶ子「エー其れ尋常の病人ではムいません、へい、ツマリ發狂人でムいますして「ハ、ハ、ハ」氣狂ひとへ、フ」其れは近頃珍しい病で併しモ「余程長ムとかね」「エー」マダ昨今の事でもムいますして「フンフン、ハ、ハ、ハ」實は其者の盜難に逢ひましたの氣狂ひの原因でムいますして先づて或るお得意様へ唐人參を持って参りますと途中で何處かの書生体の男に其唐人參を奪はれ眞ッ青になつて歸りま

した併し固とより奪はれ様と思つて故意に奪はれた譯でもないから主人の方でも災難だから諦めるから此後は能く氣を付けろといふて勘辨をして呉れたのですけれども當人が實お律義な氣性れ者ですからドウも御主人へ濟まない々々ど心配して居りまして其れから妙な風も氣の狂ひまして昨日などは店頭へ来る客路を通る人お拘らず人さへ見れを人參と返して呉色人參の代と呉色ろ杯と怒鳴りまして未だ其れ切りなら宜しい昨夜などは眞夜中二三時時分とも思しき頃臥床の上で大きな聲を出して人參を返して下さい人參の代と下さい杯とゆつてトートー今朝迄怒鳴り續けで店頭のものも色々相談を致しまして手後れにならない内に先生も願つた方ダよいといふ事決定り

まして只今願ひお出ましたので「フーン夫は近頃氣の毒千萬の事で併し不斷余程氣の小さい人間だと見ているが併し「氣狂といふ程の事ではない一時逆上したけれど今中に早く手當をすれば必ず癒るに違いない併し「いふ病人は汝の家見たやうな騒がしい所へ置いては不可んからッシれ家へ連れて来ておくがよい一時も早い方がよいから直ぐ連れて来て見るがよい」早速御承知下さいまして忝ふ存じます何分宜しく願ひますといふて歸り行くそれから此男は丁子屋へ参り「エー私ハ敷井竹庵の宅から出ましたか私と一所ハ唐人参を一貫匁直ぐも持て来て呉れい」と申したれば「丁子屋方までと日頃の大得意先からの注文なれば直ちに註文品を取揃へ代價を受取りまして其男と

一所に小僧と遣ると殆て敷井醫士の玄關迄参ると前の男は先きへ上つて「其人参を此方へ出せ」として小僧より人参を受取り「チヨイと唐紙の側へ隠し置いた奥へツカケ上つて参り「エー只今の氣狂ひを連れてまいりまして玄關に待たせてあります」サ、直に通うしてオクレ」へイドゥカ願ひます」と再び玄關へ出で来り小僧は向つて「この奥ハ先生が在らッしやるから代を載いて来な」と小僧を奥へ遣り後姿を見送つて隠し置いたる唐人参を持つて逃げて形を失したり敷井醫士の奥坐敷と奇々妙々の戯場と代りたり「サ、此方へはいんナ難有う存じますサ、モット此方へ……離の茶でもやれ」ドゥツお掃あさらんで「ムー別に血色も變つた處もないな沈靜いて居ると見えるな……」ウー幾才に

れなりだエ、汝はいくつだ、へい十八でムいます、年齢が分るか……ウン……マア心配するナ、へい難有う存じます、食べる物や何かはドウだ、別に食事に變りはなぬかな、へい別段變つた事はムいません、フー、マア沈靜いて居れ、エー先生甚だ恐色入ります、お店頭もナト無人でムいまして取り込んで居ますから人參の代を頂きたいものです、ナル程ソロ々々始まつて來ました、其人參の代が不可あぬ……それと忘れてしまへ、へい……私は忘れる譯には參りませぬ……どうりお早く願ひ度いものです、ド、ドもコリヤ余程堅く凝つてるものと見えるな……人參の代を貰ひ度いなんて誰から貰う積りある、へい……あなたから頂戴致します、ソレが發狂人ぶからソ、ソナとといふのぶ、エ、私と發狂でも何

でもムいません、アハハハ、其發狂でないと思つて居る所が發狂だ、人參の事は更お忘せてしまへ、忘れて、マ、ヘト仰有ても只今持て參つたばかりで忘れられる筈が有りません、イヤ、サド、ウモ、是は不可、少し寝かしておいてソレかふにしやう、先生、ド、モ、何な、ド、モ、それは實に……あなたれ氣か變です、せ、エ、イヤ、モ、汝へ少し此方へ來て休んで居れ、マ、分らぬ、ソ、ソな事をしては居られませぬ、ソレでは又後に伺ひましよう、ソ、ソレが宜からう、ソ、ソレは亦……と、販り行く最後に事實判然し……、ときは大變、快しからん事だ、……

第四笑

饒舌、嗅

ナ、ロ、イトおけちさんこの間、蕎麥屋の鍋ちやんわ、仕事

郎の熊さんと乳々繰りあつて逃亡したそうですホントに
 マア小娘と小袋には油断が出来ないつていホントですチ
 ー油断が出来ぬで思ひ出しました私どもの斑がモ一兒を
 生みましたよ此間まで未だヤレテ人の懐へば入りは入
 つて居たのに呆れ返ります猫の事で氣が付きました向ふ
 の芥塵の中に猫の兒が犬又噛まされて死んで居りますよ犬
 で氣が付きました米屋の丸は瘡で尻へ穴が明いさそう
 で尤も明いたで氣が付きました向ふ横町の車屋のお色ち
 やんは誰か見たか分らない兒を生んで後が悪くつて
 死よそうだそうです死にそうで思ひ出し竹さん處のお
 老人さんぶモ一アノ人は迎ても生られますよ老人さん
 で氣が付きました地主の隠居ですよ今年はモ一七十八で

しやうそれぶのに下女のお釜に手を出しんだか足と出
 したんだか外の者を出しさんぶの分らないけれどトウ
 ヲヤボテレンおして今月来月ぶさうですよ今月来月で
 氣が付きました差配の親爺が不審な顔をして來まよ親
 爺で氣が付きました私しの處の親爺はアノナ歳を取つて
 居ても夜るがうるさくつてしつこくつて呆れさりました
 よ呆れたで話しが有りまよ裏のお婆さん所は亂ちやんで
 すよ今年やう々々十四ではムムませんか先達りてから見
 へないと思つて居たら妾奉行お行つたんぶさうです感心
 ではムいませんか感心とムへば未だありますよ直し屋は
 松さんでまよアノナ小兒の癖は樽屋の老人さんのお此間
 病氣で寝て、飯が食なむつて之をカンセン(惘然?)だと思

つて密柑みつかんを持っていつてやつたそうですよ密柑みつかんで思ひ付いたお隣りのみかちゃんみかちゃんは吉原よしわらへ行つたから大變たいへんお買れが長ながくつて横濱よこはまの人とかお受け出すつて一昨日きのうお隣りおとなりの話はなししお来たそうですよ話はなししで思ひ付いた寄席よせへでるトウツンの話はなし師家しやチーちはれは「クラツプ」とか「ボラツカ」とかいふ人の日本にっぽんの女の假聲かりこゑが上手うまいですチートウツンで思ひ付いたトーショントーションと一所いっしょに寝て見たらドンナだらうチー寝て見たらで思ひ付いた寝て、焼芋やきいもの五十錢ごじゅうせんも買つて来て一口ひとくちに食くつて見たいチー（兼あま喉のど口くちを揃そろへて曰いく）

ホントおさ、そうでもチー、そうですよ、そうですよ、

第五笑 お三の傳

ニイ一席いっせきうかいひますする本笑ほんしょうハお三の傳お三の傳と下題げだいと掲かげま

して申し上げまする借お三とヤしまするものは元もとを正ただせば矢張やばり人類じんるいの一種いっしゆでムいまして決して不ふ思し儀ぎな虫むしでも蚊かでもありませぬ我々われわれと均ひと々ごとく口くちを開ひらいて居る動物どうぶつでムりまするが只少し毛け躰たいの變かはつて居るのは其その丈だけが短せかくつて其その臂うでが太おくつて其その足あしが太おくつて其その手てが肥こへて其その毛けが粗こんで其その頬ほが紅かく黒くろくして其その形かたちが舟ふねを平地へいぢお置おくやうお事ことだけです其その餌えは主おもにお焼芋やきいもを常食じょうじきとして毎日まいにち五六回ごらいつ主人しゆじんの膳部ぜんぶお在おる肴さかな杯はを素早すばく捲つみ食くひをして生いきて居いりますする其その外ほか食じき福ふくお富とみんで居いりましたして且また那そのの残り物のりもの奥おくさんさんの残り物のりものホツナヤンの残り物のりもの娘むすめ様の残り物のりもの等ら凡たゞと残り物のりものといふたら何なにでも蚊かでもお三お三の膳ぜんに載のつて居いりますするがただから飯いを食くふときハリンリンからささへ食くべてイいしが分わ

らん位ですその位色々な食物があるにも構はずせうしでも主人の膳に在るものを食はなければ生死ていられない動物です其産地は重も南部(小田原邊)東北部(仙臺邊)常陸房州邊)でいまして南部産のお三人種は産るものが多い東北産のお三人種は種に正直なものがありまを借今日お三といふ人類のたんを殖へて参りまして大變ななかりましたけれども一番の最初は只一人でムりましてそれを見らるる養生の子を孕み番頭の子と孕み車夫の子を孕み八公の子を孕み熊公の子と孕み豆腐屋カツツギの子を孕み八百屋の子を孕み魚屋の子を孕みして忽ち四五千人数にならまじで今日お至つたので併し先祖のお三は中々両親の骨と折つて接へたのです其父母の夫婦あなつてか

より二百二十二年と三少月四十九日経つても子がなく之れ地と仕様がなぬといふ毎日夜荒神様祈つて居りますと丁度保祿元年藥鐘年鍋の三月茶釜の味増日あなるのと日々其母の月経が留まりました夫れより十月程たつと其母の腹の中で間男をして亭子に見付かつて鍋を被つて逃げた所を夢に見ましたスルト其翌日生れ落ちたのが即ちお三ですお三生をて色の黒いとと釜の下の様です泣き聲は丁度火吹き竹を吹く様です段々大きくなると其足は水瓶の様も色で其手は味増樽の様で掌の平と杓子の様です其腹は籠の様です其顔は七輪の様で其髪は松蔭の如きの様です常に遊ばざるに直ぐは火箸か摺子木で遊ばす他の見共と喧嘩をすると直ぐに火箸か摺子木で遊ばす

し或は十六七になると唐人鬚の頭をカボチャの櫛に大き
く結び毛の色は幼い時分とい代りまして幼い時分にと極
細は横なのが十六七になると色蜀黍の毛の様な色になり
ました愈々お三の本色を現はしましたから之から各所に
赴任致します赴任するや否や且那の事と陰で悪る口を云
ひます奥さんの事を隣家へ行つて讒訴致しますッ一なつ
て来ると井戸端會談へも出席してお辨茶羅を並べ立てま
す買ひ物に行つて尻尾を切つて焼芋の料又充てます番頭
にお菜の盛りゆゑを注意します受附は書生お實を盡し内
々で衣物の結びと繕つて置きます之から段々お三人種は
殖へて来る原因になります余りお長くなりますから此邊
で結局を致しまして御免と蒙りますお大風さま

第六笑 狂大學

放蕩息子階上に獨坐し頻りに吉原細見を讀んで居る無學
なる觀爺が不審に思つてソート覗き見る「オイ今汝への讀
んで居る本は何だへいこれは何日もの大學でとッ一ッ
少し本が違つてる様でも「へい是れはッノ何です極詰ま
らん大學で詰らん大學で此が有ますか「イエ色々ムいま
も是れは今度文部省で出版おなましまし大學で「ヨッそん
なら何日もの違つて居ると承知しないぞ「サ一讀んで見
ろへい是れは全く大學お違ひありませんが狂大學と申し
ます併し中は大概同じです汝へ胡麻化すな何よしろ讀ん
で見ろ今スツカリ聞いて居たぞ「イエ中々違つて居ません
讀ませしようにエ、ト………、大客朱器笑具エ、ト御亭主

の曰く大概はエ、ト格子の腔にしてエ、ト兎角寢室に入
 るの門也エ、ト獨りエ、ト此邊の損するに依るエ、ト
 本望之に伏すエ、ト客者必きエ、ト其迷はざるに庶幾矣
 エ、ト「グウケイ」胡魔化したやうお思はれが先刻から
 云種を聞ゆて居ると吉原の大門近邊の車夫は粗暴くつて
 毎日喧嘩をするなんチ事ありませう「ハ」有りませ
 エ、ト「縋」の門の前に曰く日々粗暴くして又日に粗暴く
 なま、ト能く讀めない昔は焼場の臭氣おしたる今では政
 府の注意を有届き烟筒が高く成つたから臭はないと云ふ
 事があるか有りますどもエ、ト臭氣千住是れ上の止む
 所夫也から反浦で兵隊おサ「ハ」ルと抜いたら吉原中で大
 騒だな、ト「ハ」事有りますか有りますエ、トエ、ト一人反

浦で剣を抜けば北郭亂を爲すと思はれても夜具を新
 調いてやれば大切にするあんてい事有りますか有ります
 すエ、ト夜具を新おするよ在り自然と大事にするよ在り
 「又女郎は花魁に限るの新造は遣り繰りをして禿と居眠を
 するツてエ事が有りますか有ります共エ、トエ、ト女郎の
 君となつては亂に止まり新造とあつて遣繰り止まり禿
 とあつては居眠に止まりエ、ト人の親となつては小言お
 止まる「ソ」ナ事有りますか夫れに君だの僕だれども
 書生さん杯は早く飯さないと日曜おも来られなくなるつ
 てい事有りますか「ナ」ヤント有ります僕々さる客人はア
 、粗ン氣おして飯すに止まる見番お剛情と張つて伊勢屋
 の久兵衛お扱たてエ事有りますか見番たる剛情は久兵

衛に止まると有りませと「夫れから若衆の重兵衛も借金が出
 来て重兵衛が失策つたのを詫てやつたてエ事がありませ
 か」有ります共エ、ト右腕の重兵衛若い者の癖に給金頗る
 借金あり今亭主の腹立つ處も依つて更に外聞を考へ黙り
 て詫する事快しからん事をいふ奴だモ一止めよう人を馬
 鹿あしては……………

笑 本 終

明治廿五年六月十一日印刷出版

東京市本郷區駒込千駄不町五十番地

編輯兼發行者

下 山 國 三 郎

全 神田區花田町壹番地

印刷者

宇都宮榮太郎

